

宮の内と海崎を歩く (羽柴幹事)

三月六日（土曜）午後一（三月定例奉日研修）

參加者：高木佐助、泥谷、岩田、春日、

午後一時半西上南宮へ内て、八木橋へ下り、
 賀谷川渡氏が御出で下り、すぐ柳港の中へ歩い
 て一きわ高いところにある西米庵にのぼる。生憎く
 地主さん不在、非命せむお成りやんと谷川氏はい乃

ハ入承_レ知
ニイ庵は願金寺ハ市庵、淨土宗、正面の御本尊ハ
阿彌陀如來、脇佛三尊共ニ一黒くなつたお獅子の中
に光つていらつしやる。

境内の六地蔵の傍に據りて、
 せん碑があり、大文木蔭がたくましく白い雪を
 せてゐる。例つて見ればちよつと二米、割合今あ
 らないが木蔭として且巨木の方、いつ誰が植えた
 であらうか。

下つてこき宮ノ内ハ將軍の精兵に據ゆる者無の
ものなる。こき宮ハ將軍の前宮である由。大入島と
して鑿鑿する所兵權握りの前宮である由。大入島と
間左半に歩島があり、右半に小福長半島が伸び、
勢が女宮ノ内への入江を眼下に、嚴壁すこぶる良し
なりとみる。釜通石段ハ兩陽ハ様が冷りその槽があ
まつてさつぱりである。花が咲いたらよいであら
う。社殿のすぐ左におまじ大まきうないが「おまきよし
ん」と呼ぶが社がある。佐脇氏によると、大友興
親に於ける腰好（おきよし）ハ悠堂と記つた奥好神社
がある由。然り大友常禪が前島（大入島）や若狭の
に狩意を催し九時の禪大々陣所ハ跡、或はその位
に全くない。興隆記に於けていゝその陣所はあつ
たとせばそれは今も狩生であらう——というよ
推測を執り合へた。

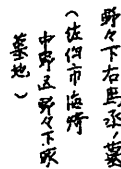
谷川氏民衆共を國邊から驅逐し、血に染
 城さん」と噂ぶつてゐた。このごろ改集し、はげしく、
 女祠、山城神社を訪ふ。一寸八分の銀首飾を事
 末に娘へのこと、落人五十人が切腹して果てた
 かうよう、伝承のおとこ、祠の横に一石牌
 五輪茶や二三の古塔があり、伝承の裏付けとし
 るようである。お年よりから、この伝承、いん

書にとつて残したいものである。

甘泉を背に山を下り、娘さん達を導くかゝり
中にはいつて早春の海を、お古、こち、雪裏におさるる
秀島を手にとつて、垣立て、垣より大規模に造成する
といふ大幹水場、水成基地に、なれ海が、すゝ暇へ吐
ておる。

歴史的に於いて、大友興廢記に記されている
出て来る能門や宮ノ内、こゝろあたりの、これか
るどのようなように興廻して行く
のであろうか、

指矢(トセカ)標槍(ハネ)止して、その矢(ハネ)の飛来(トキ)を
知(チ)することゝ一時(トキ)半(ハネ)すぎのバスに乘(ノ)る。谷川氏(タニガハシ)
街(マチ)邊(ヘ)で手(テ)想(オモ)ひ以上(トキ)く、な見(ミ)聞(ク)か出(デ)来(キ)たことと
附(ツ)けなから、……。



悔憤では、先ず野々下家の築地へ。そこに凡岡
のような、空篋印塔の笠をいただいた左輪塔、佐伯塔
限の臣野々下古馬丞の墓などとして、野々下姓一
が祀つてゐる。すぐ前に別の石塔が添ひ「天馬院
教玄速居士」と戒名まで記されている。そして、
永七年十一月二十五日既高祖にて討死の旨も書か
てある。

そこへ野合下り日を生かす情
下るる。すべりて依承で、あるが、それは煙の立つ
ころに火があるが如く、歴史があつて依承がほじ
り、このような墓落が出来、そして今日に成つて
ゐる。軽視してはならぬ。

すく横に無徒輩が一基、倒れ、羊皮土に埋れたる。誰かが抱え起したる「樵大僧都」不篤院養元法師政十二己丑年云々」とある。ここは廢寺ノ趾であらうか。

私達日野々下家にも邪魔して、

研修用地 園力複写

を見やていた。たゞ、そゝて立派な蜜柑のやちて
なして賣ける。

少くも幾れたが山ノ口常盤神社に参拜する。
惟摩と犯る佐伯十社ハ考へ属する。参道に立
つ鳥居には「常之屋宮」とあつた。天井の低い
舞殿、神殿の横の森の一部份を立てゝいるテレ
ビジョンテナ、境内の一角は高い所にあつた石
塔に「箱前大菩薩」とあつた。なと印象に残る。

歩けばはばりいろ／＼なものに都つた。一かゝる。
殆んど何もなないかと思つてゐた所は、意外なま
よかゝるが、つてある。歩いて街道まで出て、予
定より早く海岸を後に帰りのバスに乗つた。

會員希望者に頒布す

①明治三十二年刷四一陸地測量部「大分」二十万分の一（原図増刊強文蔵）

別府、大分、臼杵、佐伯、杵築江、宮崎、熊本、古江、
竹田、日田と大分県の主要部の今から八
十年前の姿、今の国道十号線は全くなく
三望、山形市、重岡、赤松峠が官道
のつてゐる、歴史的な地図。

② 昭和二年開國（興銀銀行政商一押蒲記）全前
「佐伯」 二万五千分の一（原田利恭 弘書
香近川は昔まゝ、船頭所川、女島、沖は
千島、貝が採れるところ、板前川もそ
のまま残っている。今から四十四年前の御土
茶まで、海軍航空隊もやけれど、幹線道
もない。頃の貴重貨、二万五千分の一の地図

右二種会費の現地研修用に、又数十年前の
土とせらるる手引に、由利用下まい。一応全
方で一括被掌、希望者に一葉百圓づいて頒た
す。(複写実費百六十圓のとこを研修用に
て格別を扱ひ、遠方の方は送料由利用下まい)
尚今後も研修用資料、要致、圖書も韓契
師で空易に入手出来るよう、このよう有利
ついで積極的に取扱いまいです。(幹事

3.